

令和6年度札幌市研究開発事業「子どもの困りや悩みを早期発見する取組の推進」

研究成果物について

1 本資料の作成にあたって

本研究開発事業は、令和6年度に「子どもの困りや悩みを早期発見する取組の推進」に向け、1人1台端末の「心の健康観察」アプリの効果的な活用について、5校の研究推進校において取り組んだものである。

研究を進めるにあたっては、大学教授や本市スクールカウンセラー・スーパーバイザーなどの有識者からの助言を踏まえ、次の①・②について実践研究を行った。

- ①子どもの日々の心や体の変化について複数の教職員で把握するための組織体制や、早期発見し適切な対応につなげることに関する実践研究
- ②いじめに関するアンケートを実施し、その結果の分析方法や、アンケートの結果を基にしたいじめの解消に向けた研究

こうした実践研究を通して明らかとなった成果や課題について、各研究推進校がまとめた資料等を共有することで、各学校におけるいじめの防止等の取組に生かしていただくことをねらっている。

2 効果的な取組例について

本研究において、特に効果的であった取組例を以下に記す。

北九条小学校

- ・アラートや話したいボタン対応について示されている児童の一覧表を作成したり、アラートが発出されている児童のいる学級に「シャボテンカード」を配付したりして、漏れがないよう対応した。
- ・11月の「悩みやいじめに関するアンケート調査」に加えて、高学年（4～6年生）のみ1月にも同様の調査を行った。どの学年においても、2回目に発生率が大幅に減少する傾向が確認された。11月の調査で実態を詳細に把握できたことや、組織的に対応できたことがいじめ発生率の減少につながった
- ・児童に対して、自身の毎日の健康観察を表したグラフを振り返るよう促した。

幌北小学校

- ・毎日の健康観察において、心身の状態に「×」が3日連続で付いた場合に声を掛ける取組に加え、突然「▲」「×」が付くなど状況に変化が見られた場合については、児童生徒の実態

に応じて、アラートを待たずに関わるようにした。

- ・児童の回答状況を確認した担任外の教職員が、教職員に対して、心配な兆候が見られる児童についての情報を積極的に発信した。
- ・先生との関わりについて児童がどう認識しているかを把握し、児童の実態に応じて、日常的に進んで関わりをもつようにすることが、いじめの未然防止や対処に役立つことが分かった。

白楊小学校

- ・アプリ等の活用により把握した、心配な兆候が見られる児童については、毎週の職員集会などで共有し、複数で対応した。
- ・毎日の健康観察及びアンケートの回答結果を基に、「教師との関係性/接触頻度」が低い児童に対して、児童の実態に応じて教職員から声掛けを行った。
- ・多くの保護者から、シャボテンログの具体的な内容を知らないという旨の声があったことを踏まえ、アプリについての啓発やアプリ活用の効果についての周知など、保護者との連携強化について検討した。

北辰中学校

- ・毎週水曜日の1時間目に「情報交換会」を開催したり、学校独自マークを用いたりして、生徒についてどのような支援・指導・相談が行われているのか、教職員で情報共有をした。
- ・アプリの回答結果等から心配な兆候が見られる生徒については、「お知らせ票」を作成して教職員に配付し、「話したいボタン」や生徒の変化等についての見逃しを防いだ。
- ・アプリ活用にあたって、教職員及び生徒に対して、なんのためにアプリを活用するのかという目的を明確にして、適宜伝えた。

福移学園

- ・「話したいボタン」の相談先に、スクールカウンセラーなどの担任以外の教職員も含めて複数設定した。（当該学校では25の相談先を設定）
- ・心身の状態に「×」が3日連続で付いた場合に発出される心身の不調アラートを、教職員のメールにも通知が来るよう設定を行った。
- ・いじめ解消の目安とされる3か月という期間なども踏まえ、アンケートを複数回実施することで、いじめの行為が続いているのか、止んでいるのかについて、児童生徒本人と確認を行う契機とした。

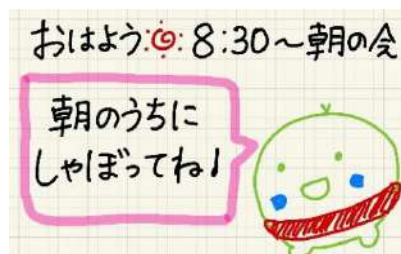
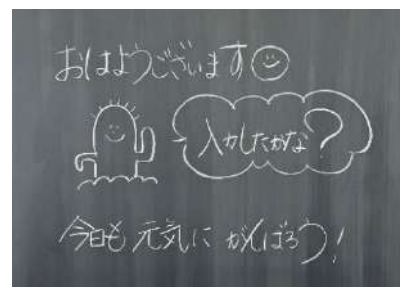
児童の困りを解決し、豊かな成長を促すシャボテンログの運用と組織体制のあり方

札幌市立北九条小学校

1 児童の困りや SOS を見逃さないための学校組織としての取組

朝の inputs

- 本校では、登校後、8時35分までに児童が各自入力している。担任は朝の会までに学級の inputs 状況を確認し、児童たちの心と体の様子の把握に努めている。
- 3日間連続で不調が続くと発出されるアラートが確認された場合は、原則その日のうちに担任から児童に声をかけ、様子を確認したり、適時相談を受けたりする。また、話したいボタンが押された場合も、できるだけ早く児童と話す場を設け、悩みや困りの解決に努めている。
- シャボテンログ導入当初は児童の朝の inputs が定着しない時期もあったが、右の写真(資料1)のように各担任が児童に継続的に inputs を呼びかけたことで、現在は毎朝の習慣として定着することができている。



(資料1)

結果の共有

- 担任外が9時までに、アラート・話したいボタンが発出されている児童の一覧(資料2)を作成し、管理職・担任外・養護教諭・各学年・学級と情報を共有している。その後、養護教諭が午前中のうちに各学級を訪れ、アラートが発出された児童の学級に「シャボテンカード」(資料3)を配付することで、inputs 状況の見逃しを防いでいる。
- 頻繁にアラートが鳴っている児童については、その都度教室での様子を確認する。また、急にアラートの回数が増えたり、話したいボタンが押されたりする場合は、児童一人一人の変化をよく把握し、適切な対応に努めている。

(資料2)



(資料3)

話したいボタンの活用

- 本校では「担任の先生」「その他の先生」の2種類のボタンを設定した。「その他の先生」が押された場合は、学校いじめ対策組織で担任外や養護教諭の中から適切だと考えられる先生を適時割り当て、対応している。担任外の教員が聞き取りを行った後は、内容に応じて担任・担任外・養護教諭・管理職と共有している。
- 相談の内容は様々であるが、どの児童も話し終わった後は安心した表情を浮かべていた。相談できたことへの満足感や、悩みを打ち明けることができて安心を感じることができていたようである。
- 児童アンケートからも、「自分の気持ちを先生に伝えられてよかった」「悩みを聞いてもらえて安心できた」という記述が見られ、話したいボタンの活用が児童の安心感につながっていることが確認できた。

2 いじめの深刻化を防ぐとともに、いじめの解消まで確実にを行うためのアンケート実施

アンケートの活用

- アンケート終了後、アラートが発出されている児童については、早急に聞き取り調査を行った。聞き取りの内容に応じて、少しでもいじめの可能性のあるものについては学校いじめ対策組織で検討し、複数の教職員で状況の把握に努めた。またそれぞれの案件についてアセスメントシートを作成し、状況を記録化するとともに、対応の進捗状況について随時確認・共有できるようにした。
- 定例の対策会議に加えて臨時の会議を随時開き、どの児童の対応についても丁寧に検討できるようにした。対策会議には SC(スクールカウンセラー)や SSW(スクールソーシャルワーカー)も同席し、状況を把握していただくとともに、いじめの解決や解消に向けた助言をいただくなど、専門家との連携を図りながら適切な対応に努めた。

複数回のアンケート実施

- 本校では、11月の「悩みやいじめに関するアンケート調査」に加えて、高学年(4～6年生)のみ1月にも同様の調査を行った。

○どの学年においても、2回目に発生率が大幅に減少する傾向が確認された。11月の調査で実態を詳細に把握できたことや、組織的に対応できたことがいじめ発生率の減少につながったと考えることができる。

○一方で、11月に確認された案件の全てを解決することができていないという事実も明らかになった。どの案件についても継続的に対応を続けているものの、一日も早くいじめが解消するよう、引き続き児童の様子を学校全体でしっかりと見守っていく。

3 成果と課題

成果

○シャボテンログの使用について、児童アンケートからは次のような声が挙がった。

- ・ボタンを押すだけなので使いやすいし、その日の気分が表示されるのでよい。
- ・悩みや困りがあるときにすぐに先生に相談することができてよい。
- ・自分の身体の調子の変化が分かって便利だった。

○シャボテンログに対する児童の満足度は非常に高く、7割を超える児童が使用について肯定的な回答をしている。簡単な入力で自分の心と身体の状況を確認できたり、気軽に先生に悩みを相談できたりするシステムの有効性が確認できた。

○また、保護者アンケートからは、次のような声が挙げられた。

- ・児童が気軽に先生に相談できるため、学校生活の安心感につながっている。

○悩みや困りを自分から言い出しにくい児童にとって、アプリを使用することで先生と話すきっかけを容易にもつことができる。また、相談して悩みが解決したり、自分の気持ちを整理することができた児童も多く、その経験を積み重ねることにより、今後はアプリを使用せずとも直接先生に相談できることも期待できると考えている。

課題

- 教職員のアンケート調査からは、次のような声が挙げられた。

・「話したいボタン」を使用する児童がまだ少ないと感じた。
・アプリやボタンをあまり活用していない児童の中にも、悩みや困りを抱えている児童がいると考えられる。

- 児童によってアプリの使用状況に差があったり、悩みがあっても「話したいボタン」を押すことができていない児童がいたりすることが考えられる。日常からより気軽にアプリを使用することを呼びかけるとともに、アプリの状況のみにとらわれることなく、より幅広い視野で児童の様子に気を配っていくことの必要性を感じている。

- また、保護者アンケートからは、次のような声が挙げられた。

・アプリがあることは知っていたが、詳しい機能については把握していない。
・シャボテンログの取組を、より幅広く周知するとよい。

- 今年度は導入初年度ということもあり、児童への指導に注力していた反面、保護者への周知が不十分であったことを反省している。次年度以降、機能や児童の入力状況について保護者へ周知する機会を増やし、よりアプリに対する理解を得られるように工夫していくことで、家庭と学校が共に児童を支え・見守っていくことができる体制づくりに努めていきたい。

児童の困りや悩みを的確に捉え、効果的な対応に結び付けるためのアプリの活用について

札幌市立幌北小学校

1 個々の児童の状況を把握し、対応に結び付ける仕組みづくり

複数の教職員が、児童の日々の心と体の状況を把握し、共有する体制を構築することで、いじめに対する組織的な対応に結び付けることができると考え、活用に取り組んできた。その中で、効果を上げている学級の事例を参考に、組織的な対応に結び付く仕組みを検討した。

(1) 日々の健康観察の具体的な方法

① 学級での朝の入力・確認の方法

児童・教職員の基本的な入力・確認の流れ	
児童	登校 → 端末準備 → 各自入力
担任	学級の入力確認・入力していない子への声掛け
教頭 担任外	全体ダッシュボード確認(9:00 まで) 話したいボタン・アラート等に応じて対応

【基本的な対応内容】

- ・ アラートが出た際には、担任から児童に声をかけ、気持ちを聞き取る。
- ・ 突然「▲」や「×」がつくなど、状況に変化が見られた場合などには、アラートを待たず積極的に関わりをもつ。
- ・ 聞き取りをしても状況が改善されない場合、特別支援コーディネーターを中心にケース会議の開催を検討する。

② 「話したいボタン」の活用方法

本校では、担任の先生 学年の先生 その他の人の3種類のボタンを使用している。
押された担当者がまず声を掛け、必要に応じて場所や時間を調整して対応している。

担任・学年	状況を見て声掛け、対応
その他の人	まずは副担任(低・中・高)の担任外教員が、「誰と話したい？」と声掛け。要望のあった教職員につなぎ、聞き取りの調整を行う。

(2) 取組を通して見えてきたこと

- 児童が入力の習慣を身に付けることで、無理なく状況を把握できるようになった。
- 習慣付けには、入力を促すこまめな声掛けと即時確認及び対応が効果的であった。
- 職員室では、児童の回答状況を確認した担任外教員が、心配な兆候が見られる児童について積極的に発信した。情報共有と対応の抜け漏れを防ぐ上で有効であった。

(例)教諭 A「〇〇さん、めずらしく『わるい(×)』の回答が続いていますね。」

教諭 B「朝は行事等への参加があり、対応は避けた方がよいかもしれません。」

教諭 C「〇〇さんが安心して話せるよう、休み時間に声を掛けてみましょうか。」

○アプリの回答結果と、「すぐーる」に寄せられる家庭での児童の様子や保護者の見立て等、複数の情報を関連付けることで、児童の心の状況をより早く把握し、対応につなげることができた。

○心配な兆候が見られる児童への関わりについては、児童の困りや悩みの内容等に応じて、どの教職員が関わった方がよいか検討することで、児童の思いを受け止め、適切な対応につなげることができた。

○「話したいボタン」を押した子への関わりについては、当該の子の周りに他の子が集まっている時は避けるようにするなど、関わるタイミングを配慮することで、安心して困りや悩みを話す児童の姿につながった。

2 アンケート結果を、効果的な対応に結び付けるための具体的な活用方法

アンケート結果を様々な立場の教職員と共有し、効果的な対応につなげることができるよう、以下について検討することとした。

- ・アプリはあくまでツールの1つである。教職員の視点から把握している児童の状況と、アプリの結果とをどのように関連付けると、多面的に児童の様子が把握できるか。
- ・アンケート結果を踏まえ、いじめの認知や解消についてどのように判断をするとよいか。
- ・アンケートの回答では、いじめの訴えがなかった児童について、どのように困りや悩みを把握して対応していくとよいか。

【アンケート実施後の対応】

① 個別面談の実施方法

- ・アンケートの回答を基に、アラートが発出された児童や、学校がすでにいじめと認知している児童から優先的に実施する。
- ・いじめを認知している児童との個別面談については、日常的に関わりのある担任外教員も同席する。

② いじめ防止対策委員会の実施

- ・いじめと認知していたり、不登校の傾向が見られたりするなど、心配な兆候が見られる児童について確認し、情報を共有する。
- ・アンケートで「(いじめは)解決した」と回答した児童についても、いじめの行為は本当に止んでいるかどうか等について、それぞれの立場から児童の様子を確認し、情報を共有する。

(1) 回答の比較・分析

- ① 学校がこれまで把握していたいじめの事案のうち、被害児童のアンケート回答を分析したところ、以下のことが分かった。

- ・質問項目 A(いじめを受けたかどうかに関する質問)において、「ある」と回答した児童がおり、中には、複数のいじめの行為について回答している児童もいた。アンケートの実施により、学校がこれまで把握し対応したいじめについて、現在の状況や改善が図られたかどうかを確認する契機となった。
- ・質問項目 A(いじめを受けたかどうかに関する質問)と、質問項目 C 及び D(先生との関係性を問う質問)の回答を比較したところ、質問項目 C 及び D で肯定的な回答を示した児童は、質問項目 A(いじめを受けたかどうかに関する質問)で「ある」と回答した数が少ないことが分かった。先生との関わりについて児童がどう認識しているかを把握することは、いじめの未然防止や対処に役立つものと考える。

② 担任の見取りなどにより、心配な兆候が見られた児童のアンケート回答を分析したところ、以下のことが分かった。

- ・質問項目 A(いじめを受けたかどうかに関する質問)について、これまでいじめの訴えがなかった児童が「ある」と回答していた。教職員の見取りとアンケートの回答結果を生かし、児童の心の状態を把握していくことが重要であるとともに、自分から声を挙げられない子もいることを踏まえ、対応していく必要がある。

③ アプリを用いた毎日の健康観察においてアラートが発出されていた児童のアンケート回答を分析したところ、以下のことが分かった。

- ・質問項目 A(いじめを受けたかどうかに関する質問)について、「ある」と回答した児童が複数いる一方、「ない」と回答した児童も複数いた。「ない」と回答した児童に対して、アンケート後の個別面談で聞き取りをしたところ、いじめではない悩みを抱えていた。毎日の健康観察において心身の不調が続いている児童は、いじめのみならず、いじめの他にも困りや悩みがある可能性があることを踏まえ、組織で共有し対応する必要がある。
- ・アラートが発出された児童に対して、教職員から声掛けをした際は困りや悩みを把握できなかったが、アンケートの回答から、児童がいじめの行為を受けていたことが分かった。アンケートには、いじめの行為について具体的に問う質問があり、いつ、どこで、どのような行為を受けたのかを把握できる可能性があることから、毎日の健康観察及びアンケートの回答結果を基に、児童の困りや悩みの要因を把握し、対応することが重要である。

・質問項目 A(いじめを受けたかどうかに関する質問)の回答結果について、先生との関わりを肯定的に受け止めている児童の回答結果は、否定的に受け止めている児童の回答結果と比べて「ある」と回答した数が少なかった。①と同様に、先生との関わりについて児童がどう認識しているかを把握することは、いじめの未然防止や対処に役立つものと考える。

(2) 分析を通して見えてきたこと

- アンケートの回答結果を活用することは、児童の不安や悩みが何に起因するものなのか、また、現在も継続して不安や悩みを抱えているかを読み取る上で重要であり、いじめの認知のみならず、いじめの解消を判断する上でも有効である。
- アンケートの回答結果について、いじめの訴えがない児童であっても、「学校に行きたくない」などの学校回避感情が見られたり、毎日の健康観察で心身の不調が続いていたりする場合は、いじめを含むその他の疑いがあるかもしれないと考えて対応することで、児童の困りや悩みの早期発見につながる。
- アンケートの回答結果については、SC や SSW などの専門的な視点からの分析が重要なことから、回答及び分析結果の効果的な共有方法について検討を図る。

3 成果と課題

児童に対してアプリに係るアンケートを取ったところ、約7割の児童が、次のような肯定的な感想を寄せている。

・便利で使いやすい。 ・相談できるのが安心 ・自分の気持ちがわかるようになった。

一方、次のような趣旨の感想も見られた。

・先生方は、児童がアプリで回答しているかどうかだけ確認していて、回答内容を本当に見てくれているかどうか不安がある。

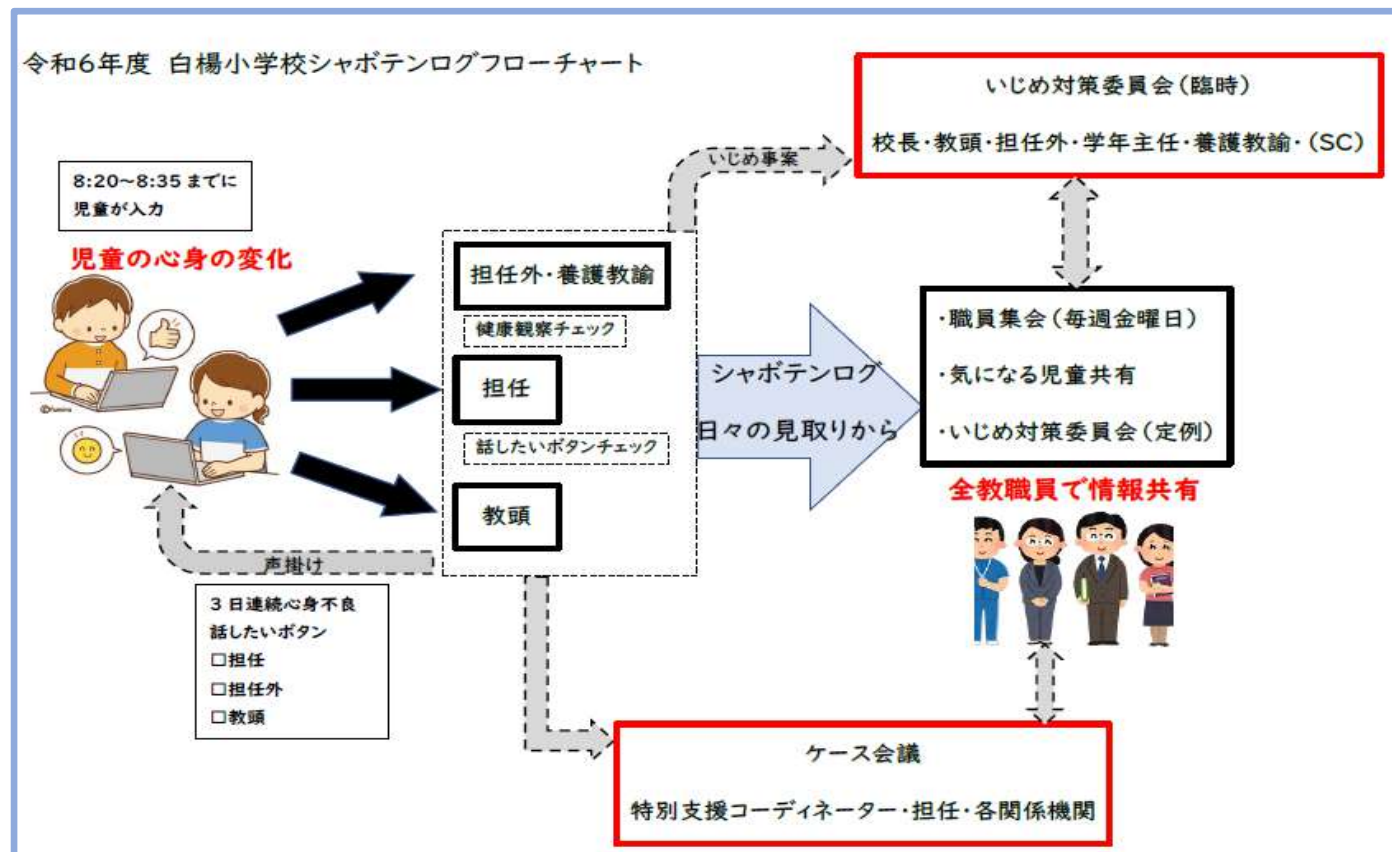
こうした児童の声を踏まえ、アプリも活用しながら、児童の困りや悩みを早期に発見し、安心して学校生活を送ることができるよう、今後も以下のことを大切にしていく。

- 教員との関わりを求めている児童もいると考えられる。児童の実態に応じて、日常的に進んで関わりをもつようにすることが、児童の安心につながる。
- アプリの回答結果を基に、複数の教職員で連携を図り対応することで、新たな視点での気づきが生まれたり、対応の漏れを防いだりすることにつながる。
- いじめに限らず、アプリの回答結果を踏まえ、児童の困りや悩みの有無や、困りや悩みが何に起因するか着目することで、深い児童理解と適切な対応につながる。
- 年度途中でであっても、アプリ活用の目的や学校体制や教職員の状況等を踏まえ、よりよい活用について適宜見直すことが、持続可能かつ効果的な対応につながる。

- ①児童の日々の心や体の変化について複数の教職員で把握するための組織体制や、早期発見し適切な対応につなげることにに関する研究
- ②いじめに関するアンケートを実施し、その結果の分析方法や、アンケートの結果を基にしたいじめの解消に向けた研究

札幌市立白楊小学校

1 児童の日々の心や体の変化や悩みを早期発見するための組織体制



心の健康観察アプリ（以下、シャボテンログとする。）の運用開始に当たり、全教職員にシャボテンログを用いる上での3つの目的を職員会議で説明し、共通理解を図った。また、質問項目、話したいボタンの種類や扱いについて、操作の説明などを行った。

3つの目的

- ①児童の日々の心や体の変化について複数の教職員で把握する。
- ②いじめの早期発見や解消を目指す。
- ③児童自身が客観的に自分の心や体の調子を振り返る。

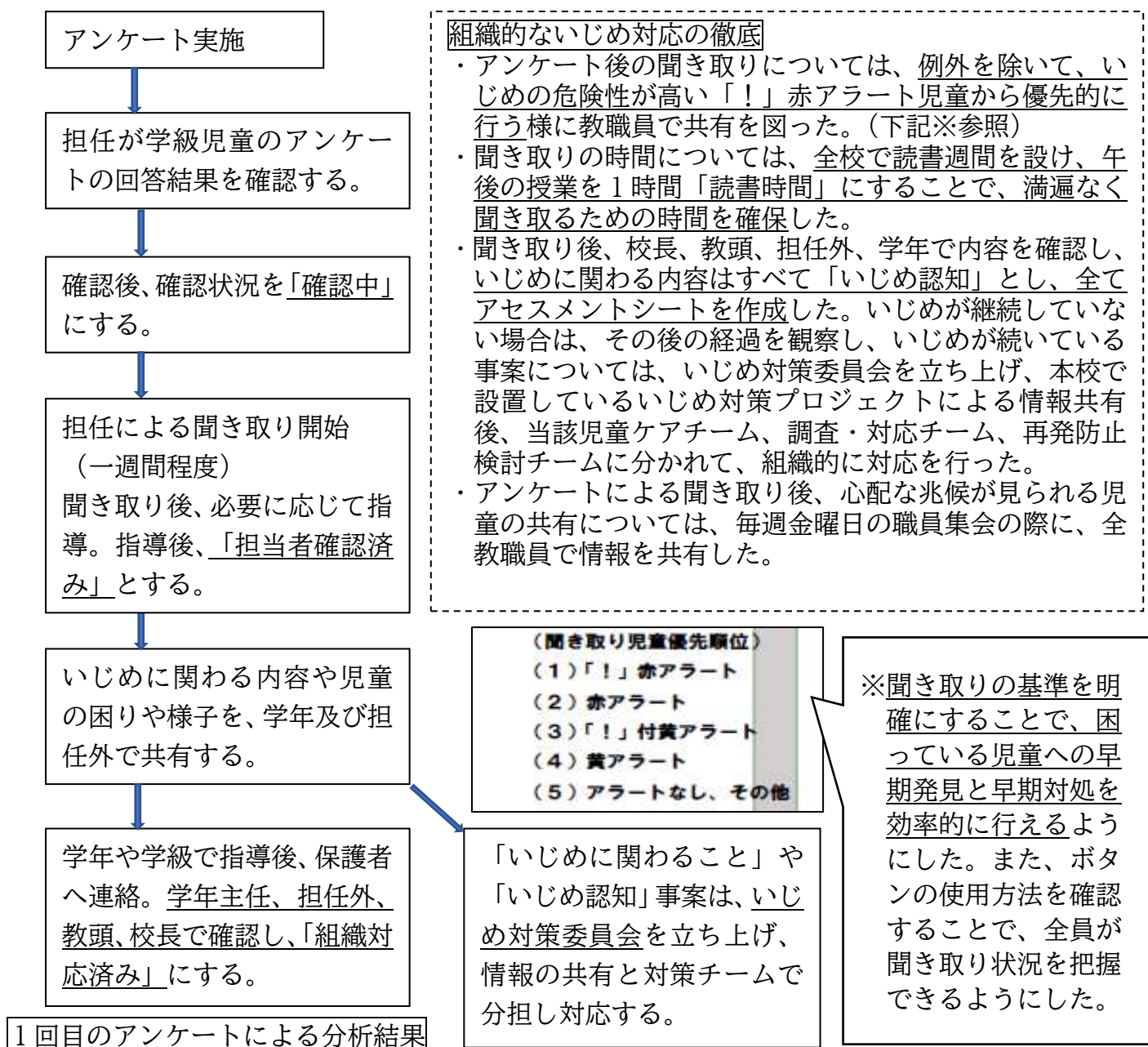
児童のシャボテンログへの入力については、朝の8時20分～35分の間に行うようにした。入力結果については、担任、担任外、養護教諭、教頭が確認し、3日連続で不調を訴えている児童や話したいボタンの対応が必要な児童には、可能な限り即時的に声を掛けるようにした。特に、話したいボタンを押下した児童については、担任のみに任せて見落とさないよう担任外が全児童をチェックするなど、複数で確認するようにした。話したいボタンの種類は、「担任の先生」「担任外の先生」「教頭先生」とした。最も押された数が多かったのは「担任の先生」で、学級のことや人間関係、家庭でのトラブル等、児童によって話したい内容は様々だった。

フローチャートにあるように、シャボテンログや日々の見取りの中で心配な兆候が見られる児童については、毎週金曜日の職員集会時に共有の時間を設けた。児童の日々の心や体の変化につ

いて、複数の教職員で把握することや、いじめにつながりそうな事案を早期に発見できるような体制づくりを目指した。

2 いじめの未然防止や早期発見、いじめの解消までを確実に行うためのアンケート実施

「悩みやいじめに関するアンケート調査」の流れ



1回目のアンケートによる分析結果

アンケートの回答結果の分析方法

- ・回答結果については、担当教諭、担任外、教頭が確認。SC、SSW と、心配な兆候が見られる児童について共有した。
- ・赤・黄アラートと先生との関係をスコア化し、相関関係を分析した。

【アラート別・教師との関係性/接触頻度平均スコア】

	赤アラート群	黄アラート群
4～6年	10.85	10.94
1～3年	6.08	6.09

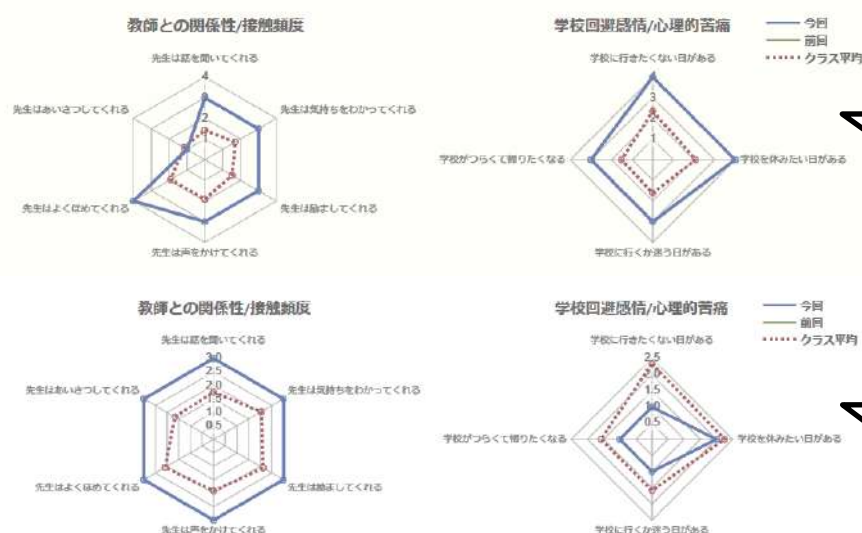
※スコアが高ければ高いほど教師との関係性/接触頻度は低く、スコアが低ければ低いほど

教師との関係性/接触頻度は高い。

先生に対する質問6項目の回答結果を合計し、平均化してスコアを算出

1. 学校の先生たちはあなたの言う事をしんげんに聞いてくれる
2. 学校の先生たちはあなたの気持ちを分かってくれる
3. 困っている時に学校の先生たちはあなたを助けてくれる
4. 学校の先生たちはあなたによく声をかけてくれる
5. 学校の先生たちはよくほめてくれる
6. 学校の先生たちは朝と帰りのあいさつを毎日してくれる

- ・4～6年生のスコアは、1～3年生のスコアと比べて高い傾向が見られた。学年が上がるにつれて、先生に対して遠慮して相談しなかったり、自分で解決しようとしたりする可能性がある。
- ・赤アラート群の児童の方が、黄色アラート群の児童に比べて、スコアが低い傾向が見られた。



「教師との関係性/接触頻度」が平均値より低く、「学校回避感情/心理的苦痛」が平均値より高い児童。

「教師との関係性/接触頻度」が平均値より低く、「学校回避感情/心理的苦痛」も平均値より低い児童。

- ・「教師との関係性/接触頻度」が平均値より低い児童は、必ずしも「学校回避感情/心理的苦痛」が高いわけではない。児童によって傾向は様々なため、アンケートによって算出されたスコア等は、個々の関わりや手立てに活用することが重要である。
- ・日々のシャボテンログの入力結果に加え、アンケート結果を踏まえ、教師に対して接触度が低い児童を中心に声掛けをするなど、日々の健康観察とアンケート結果を関連付けることで、より精度の高い関わりができると思う。

3 成果と課題

アンケート実施後、児童や保護者からは次のような声が挙がった。

【児童】

- 健康や気分の記録ができ、自己理解が深まる。
- 過去の記録を振り返ることで、自分の成長や傾向を確認できる。
- 先生に気持ちを伝えられる安心感がある。
- いじめや悩み相談のハードルを下げる事ができた。
- ▲文字のサイズが小さく、読みにくい部分がある。
- ▲送信後、先生の返答を待つ必要があるため、不安になることがある。
- ▲体温や朝ごはんの有無など、健康管理に関する情報をもっと記録したい。

【教職員】

- 「話したいボタン」を押すことで、話しづらいことを少しでも伝えやすくなる。
- 些細なことでも言いたいことが言える。
- ▲特に特別支援児童に関しては、漢字が読めなかったり、マンツーマン対応が必要だったりすることがあり、入力が難しい。
- ▲ボタンが押された際に、どういう対応するかルールを明確にする必要がある。

児童・保護者・教員のアンケートから見えてくること

①機能面での改善点

児童の記録については、低学年や特別な支援を要する児童も容易に入力できるように工夫する必要がある。例えば、すべての設問をひらがなで設定することや、寝る時間についての設問に対する回答について、「いつもどおり」「いつもより早い」「いつもより遅い」の3択にするなどの入力しやすくするための改善が必要である。また、高学年については、「朝ごはん」や「起床時間」の入力を増やすなど、より自分の健康に関して記録できるよう、オプション機能を用いて設問を追加することも改善案として考えられる。

②保護者との連携

多くの保護者から、シャボテンログの具体的な内容を知らないという旨の声があった。アプリ活用についての保護者への情報共有不足といった課題がある。今後は、認知度の向上・回答しやすい設問形式・プライバシー保護の強化・保護者との連携強化を進めることで、より効果的な仕組みへと発展させていくことが望ましい。

③「話したいボタン」の扱い

「話したいボタン」を押した後に、どのように対応してもらえるのかが不安という声があった。シャボテンログを使う際に、児童への明確な説明が必要であることが分かった。また、本校では「担任の先生」「担任外の先生」「教頭先生」という3つの選択肢だった。選択肢によっては、押される回数が少ないものがあった。実際に養護教諭に悩みを打ち明けたり、スクールカウンセラーと話がしたいという思いをもったりする児童もいた。どの児童も話しやすい機能にするには、「保健室の先生」「SC（スクールカウンセラー）」という選択肢を追加することも検討していきたい。

④その他

児童のアンケートから、「自分の体調や心の変化を考えることができた。」という旨の声が多くあった。いじめの早期発見以外にも、自分の心身の体調を振り返るよい機能である。保健「心と身体の変化」などに関連付けるなど、自分の記録を振り返りながら活用できると考えた。

2回実施したアンケートの結果及び考察

(アラート別・教師との関係性/接触頻度スコア平均 4～6年生)

	赤アラート群	黄アラート群	赤・黄なし群
1回目(11月)	10.85 (14件)	10.94 (35件)	10.80
2回目(2月)	10.25 (8件)	12.58 (24件)	7.85

※スコアが高ければ高いほど教師との関係性/接触頻度は低く、スコアが低ければ低いほど教師との関係性/接触頻度は高い。

- ・1回目と2回目のアンケートのアラート数を比べると、赤アラートは6件、黄色アラートは11件減少した。各アラート群と教師との関係性/接触頻度スコアを比べてみると、赤アラート群は教師との関係性/接触頻度が増加したが、黄色アラート群は減少した。
- ・「赤・黄アラートなし」の教師との関係性/接触頻度スコアでは、1回目の平均が10.80に対して2回目の平均が7.85となっており、教師との関係性/接触頻度スコアが増加した。
- ・アンケート結果を比較することで、児童に対してどのように教師が関わってきたのか、各アラート群の児童に対してどのように関わりとよいかについて考えることができる。

アンケートの方法や共有の仕方についての成果と課題

○シャボテンログの活用やいじめのアンケート実施において、組織体制を整えることで、児童の情報共有が素早く行われるとともに、教職員の児童の変化に気付く力が高まるなど、いじめの早期発見や未然防止につながった。

○アンケートで教師との関係性/接触頻度が分かり、声を掛けるべき児童を見逃さないことにつながった。

○いつでも児童が悩みを相談できる環境が整いつつある。

▲効果的なアンケートの時期を設定する必要がある。

▲SCやSSW、関係機関などとの情報共有体制を整える。

「心の健康観察アプリ」の効果的な運用方法の検討

札幌市立北辰中学校

1 「心の健康観察アプリ」の活用について大切にしたいこと

- ・本校では、令和5年10月から活用を開始している。非常に便利なツールだが、「心の健康観察アプリ(以下、シャボテンログ)」を使用することが目的化してはいけないと考える。本校では、現在の相談支援体制とどのように関連を図るか、どのように使用すると生徒にとっても教員にとっても効果があるかを考えながら運用している。

2 相談支援体制とシャボテンログの位置づけ

相談支援体制と情報交換会

- ・困りを抱えている生徒への支援体制は、次のページに示した通りである。(資料1)
- ・日々の指導の記録や情報共有は、「情報共有シート」で一元化している。
- ・毎週、心の教室で「情報交換会」を開催し、全校生徒について、どのような支援・指導・相談が行われているかの情報を共有している。

■参加者は、教頭、主幹教諭、各学年の教育相談担当教諭、養護教諭、通級指導教室担当教諭(特別支援コーディネーター)、SC、相談支援パートナー、学びのサポーターである。

■学年名簿と以下のマークを使用し、内容の詳細については職員室で閲覧可能としている。

マークの例) *欠席が多め ◆心の教室利用 @校外と連携(病院、児童会館等)
□SCと面談 🗨️シャボテンログ話したいボタン使用

シャボテンログの位置づけ

- ・先生方の活用目的
 - 生徒の心と体の健康観察、いじめの早期発見、生徒とのコミュニケーションのきっかけ
 - シャボテンログをきっかけに支援・相談につながった場合は情報交換会で共有
- ・生徒の活用目的
 - 自身の心と体の調子を知り、コントロールする力をつける、ヘルプサインを出す

「こころのおたより」より抜粋



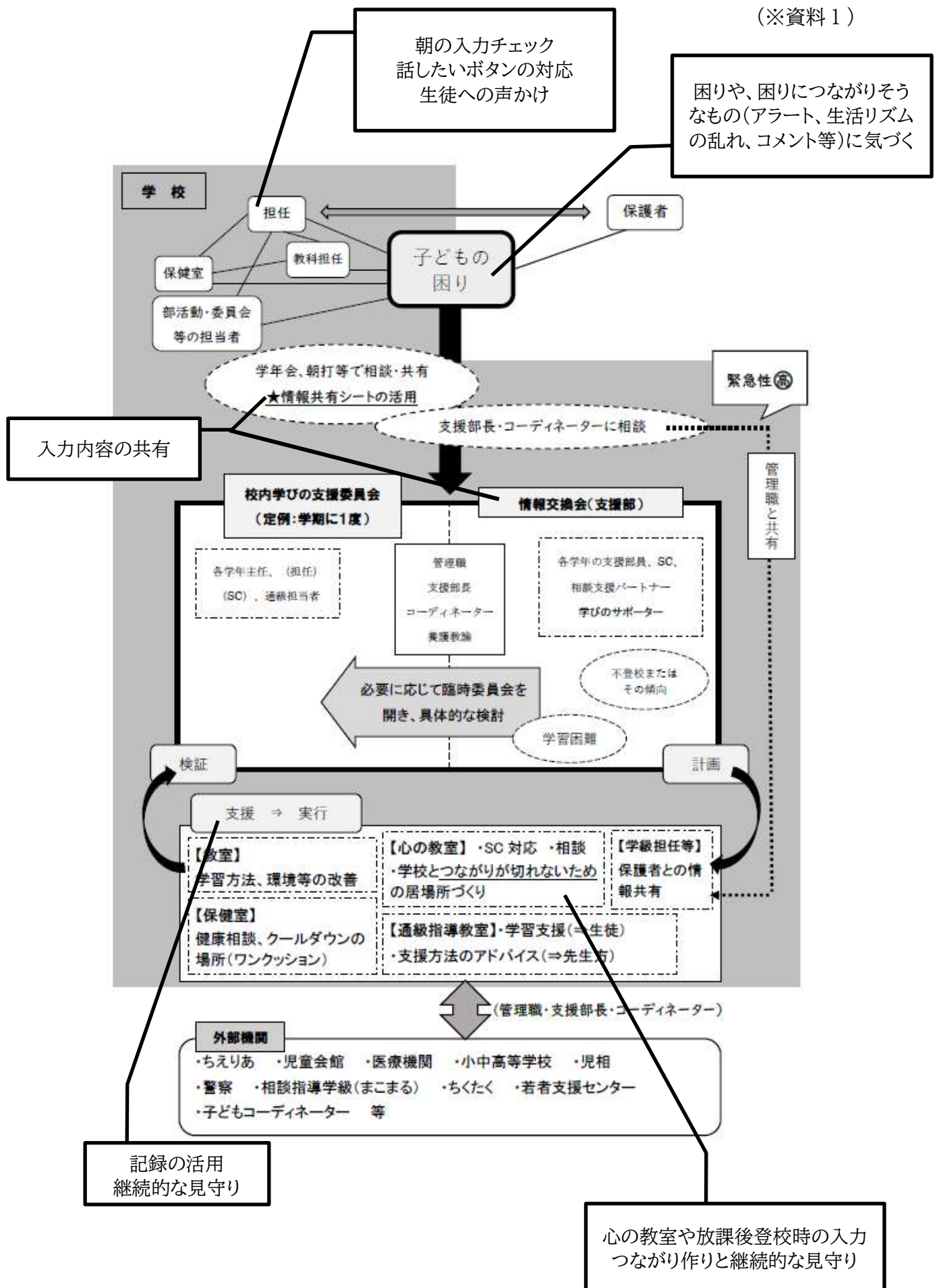
何のために、毎日とりくむの？

シャボテンログは、児童生徒が毎日こころとからだの状態を記録する、そしてアンケートに回答することで、「気づき」や「変化」を見える化するWEBアプリです。生徒のみなさんは、毎日の取り組みを通じて自分の状態を俯瞰し、自己管理能力を高めることができます。

グラフを見て、自分のこころとからだの好調・不調の波を確認してみよう



(※資料1)



3 活用の実際

入力項目の設定

- ・生徒の回答については、からだところの調子の他に、学校設定項目として、「就寝時間」「起床時間」「朝食を食べたかどうか(あり・なし)」「コメント」を追加している。

■生徒からは、「自分の体調や就寝時間を気にするようになった」「コメントと照らし合わせて『こんなことがあって元気なかったんだ』と、自分のことが分かった」という声があった。
(2024.2 校内アンケートより)

- ・話したいボタンは、「担任の先生」「学年の先生」「保健室の先生」「SC」「その他の先生」とした。

生徒に取組の目的を知らせる

- ・教育相談係発行の「ころのおたより」を用いて、シャボテンログの取組の目的を伝えた。

■シャボテンログの導入時や、4月におたよりの発行を行ったが、「『話したいボタン』って押したらどうなるの?」といった生徒の声や、「どのように使用しているのか分からない」との保護者の声もあったため、目的や活用方法について繰り返し伝えていく必要がある。
(2025.2 アンケートより)

- ・学年の取組として、アプリ内で出した「お題」に対する生徒からのコメント等を掲示し、どの生徒も見ることができるようにした。本取組を通して、シャボテンログの目的や取り組むことのよさが浸透していき、効果的だった。また、「ころのおたより」でシャボテンログの話題をきっかけに「ストレスとの付き合い方」「マイナス思考に陥ったときの対処法」等の発信を行った。

見逃し防止の取り組み

- ・生徒は登校時、各学級の保管庫から Chromebook を取り出し、8:30の朝読書までに入力を済ませる。担任は、朝読書の時間を利用して、自身の学級の入力をチェック、養護教諭と教育相談担当教諭(副担任)が全校生徒の入力を

チェックしている。また、「話したいボタン」や生徒の変化について見逃しを防止するため、お知らせ票(資料2)を作成し配付している。お知らせ票をやり取りすることで、日常の生徒や学級の様子について会話をする機会にもなっている。

(※資料2)

シャボテンログ「話したいボタン」確認票

年 組	/ ()
話したい相手	→話したら「対応済」を押してください!
その他	

シャボテンログ 気になったのでお知らせ票

年 組	/ ()
気になった内容	
☐ 連続して心・体の調子が悪い	
☐ コメントの内容	

4 成果と課題

- 友達に見られずにヘルプサインを出せる、日中なかなか顔を合わせられない担任の先生に「話したい」と伝えることができる、先生との会話が増えたなど、学校生活の安心感につながっている。(2024.2 校内アンケートより)
- 自分の健康状態がグラフで見えて分かりやすい、寝る時間と起きる時間を気にするようになった、曜日によって体調の波がある等、自身の生活について振り返り、改善しようとする様子が見られた。(2024.2 校内アンケート、2025.2 アンケートより)
- コメントから緊急性の高い困りを発見でき、相談や支援につなげることができた。
- アプリ活用の目的や意義を繰り返し伝える必要がある。
- 「先生からの返信コメントがほしい」等、先生方の反応が欲しいと感じている生徒が多い。(2025.2 アンケートより)シャボテンログをきっかけとしながら、日々の信頼関係づくりに生かしていく。
- 日々の入力チェックがマンパワーに頼っている部分がある。持続可能な方法を検討する必要がある。

1人1台端末「心の健康観察」アプリを活用した、一人一人の児童生徒にとって安心できる学校づくりと、いじめの問題等を未然に防ぐ予防的取組の充実

札幌市立義務教育学校福移学園

1 組織体制と運用方法

～日々の健康観察から児童生徒理解へと繋げる取組～

①毎日の入力を習慣化する朝の時間

・児童生徒は8:00～8:20までに登校し、8:30からの朝読書開始までに各自入力。

・3学期からは、さらに、朝の会・朝学活でも入力時間を取るようにした。

→ 毎朝決まった時間に全員で入力する取組を継続することで、誰もが日常的に入力することができる環境作りと毎日の入力内容を記録化・蓄積化し振り返りに生かすことができるよさがある。



②チェック機能を働かせた確認と対応

・「担任」…朝読書の時間に確認。

・「副担任」「養護教諭」「児童生徒支援部」「管理職」

… 朝のうちに確認。難しい場合は、遅くとも1時間目終わりまでに確認。

・「不調連続アラートの設定」…学校用アクティブメールに通知されるよう設定。

→ 入力内容を見落とさないための、二重、三重のチェック機能を働かせることで、その日のうちに対応するなど早期対応につなげることができる。

③一人一人の児童生徒の思いやニーズに応える「話したいボタン」

・種類…アプリ導入当初は、「担任の先生」「スクールカウンセラー」「保健室の先生」「学年の先生」「その他の先生」の5つを設定。

3学期からは、さらに、全職員のボタンを設定。



・対応

担任が、「『話したい』と選択された先生」へ連絡をする

「『話したい』と選択された先生」が、数日以内に声を掛ける

- *メール通知設定を行い、見落としがないよう対応
- *実際は、当日中に声を掛けることができる
- *SCの場合は、SCの勤務日(週2日)に対応

対応後は、対応内容を情報共有用のエクセルシートに入力し、支援方法の相談、決定を行う

→ 一人一人の児童生徒の思いやニーズに応えるための方法の一つ。より相談しやすい環境を作ることができる。

④児童生徒を知るための学校設定項目と備考の活用

・「朝食は食べましたか(はい・いいえの2択)」の追加質問を、養護教諭と相談し設定。

設定理由：体調不良で保健室に来室する児童生徒には、「朝食は食べてきたか」ということを必ず聞いている。体調不良を訴える子の中には、朝食を食べてきていない子がいるので、この質問を追加設定した。

→ 児童生徒のアンケートに「朝ご飯を食べる習慣がついて良かった。」という声があった。
シャボテンログが、生活習慣を見直すきっかけとなった。

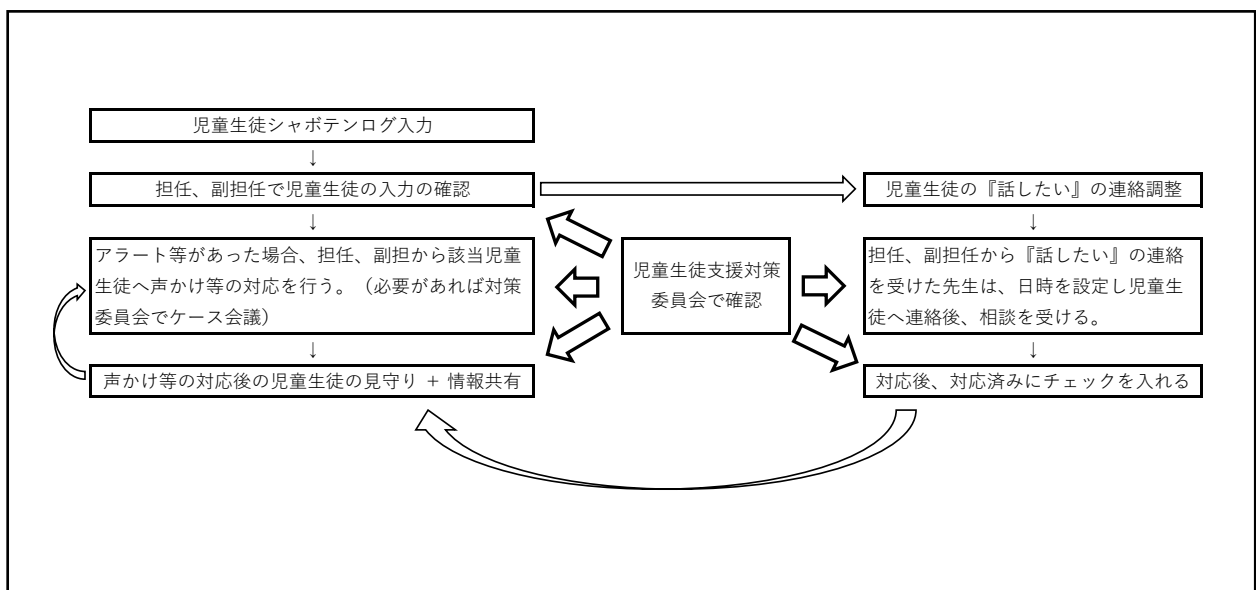
・3学期より、朝の会・朝学活の入力時に、先生が発表した「今日のお題やテーマ」について、児童生徒たちがその答えを備考欄に入力するという取組を行う。

取組理由：児童生徒との会話のネタを得ることができ、より児童生徒との関わりやつながりを深めることができるのではないかと考えた。

→ 児童生徒のアンケートに「備考を使うと、詳しく文章で伝えることができるので良いと思った。」という声があった。シャボテンログが、児童生徒と先生とをつなぐ一つのツールとして効果を発揮した。

お題・テーマ 「行ってみたい場所」		
はい	☐	韓国・京都・カナダ・岡山
はい	☐	USJ
はい	☐	USJ
はい	☐	ゲームフリーク本社
はい	☐	アメリカ
はい	☐	カナダ
はい	☐	22世紀
はい	☐	大谷さんの家
はい	☐	ベネスエラ スリランカ セウジアラビア
はい	☐	京都
はい	☐	150年前東京

⑤組織的に対応する『運用のフローチャート』



2 悩みやいじめに関するアンケートに係る効果的な分析方法

～SOSを見逃さず、早期発見・早期対応する学校組織の構築～

①児童生徒たちの変化を見取るアンケートの実施回数と回答項目

・6月・11月・2月の計3回実施。

・そのうち、11月・2月は、アプリを使って実施。アンケート項目は、A～Gの全ての項目。

→ アンケートを年に複数回実施し、回答項目を毎回同じにすることで、一人一人の児童生徒の変化を見取ることができる。

②児童生徒と向き合う個別面談の進め方

・「G3. いじめられたことがある」「G7. 今もいじめられている」にチェックをした児童生徒を最優先に聞き取り。

・聞き取りは、後期課程の児童生徒は年度当初から計画していた教育相談期間に実施。前期課程の児童生徒は朝読書や担任の空きコマの時間に実施。

→ 来年度は、前期課程においても、アンケートの実施後に教育相談を設定。アンケート内容をしっかりと聞き取るために、一人一人の児童生徒と向き合う時間を確保。

③聞き取り内容の確認・共有と全職員による見守り

・聞き取った内容は、担任がエクセルシートに入力。全職員がいつでも確認できるようにした。また、その内容をもとに、生徒指導主事が確認し、アセスメントシートを作成。

→ 聞き取り内容を全職員が確認・共有できる体制を整えることで、学校全体で児童生徒を見守っていくことができる。

④いじめ認知の基準設定と確実な把握

・「嫌なことがあったが、解決している」「嫌なことがあり、解決していない(いじめとは感じていない)」「嫌なことがあり、解決していない(いじめと感じているが、今はいじめられていない)」「いじめと感じていて、今もいじめられている」にチェックをした児童生徒全員をいじめ認知の対象とし、生徒指導主事がアセスメントシートを作成。

→ 学校としてのいじめ認知の基準や対応方針を定めることで、緊急性やリスクが高い案件に加え、その兆候までも見逃すことなく、確実に把握することができる。

⑤児童生徒支援対策委員会による組織的対応と取組

・児童生徒支援対策委員会において、SCも参加した中で情報共有し、いじめの認知をする。

・今年度は、2月上旬に同様のアンケートを行い、11月上旬に行った今回のアンケートと比較することで、認知解消か否かを検討。

→ SCも参加することで、幅広い知見から助言をいただき、いじめの認知・解消・継続の判断に生かすことができる。

3 成果と課題

<児童生徒>

①自己の心身の気付きと理解

- 「自分の体や心の調子がグラフになっていて分かりやすくてよい」(3年・6年)
- 「自分の気分や体調など、自分のことを知る良い機会になった」(3・9年)
- 「日々の生活で、自分の体調や気分がぱっと見て分かるようになったから、いつもよりも安心して毎日を過ごせるようになった」(5年)
- 「自分のことが分かるようになり、より良くなるにはどうすればよいかを考えた」(6年)

②自己開示の促進と安心感の向上

- 「自分の気持ちをきちんと伝えることができるのでよい」(4年)
- 「いつでも相談できるようになっていることがすごくいい」(6年)
- 「自分の体調や気分を言わずに先生たちに伝えることができるので、いじめなどの心配がなくて安心だなと思った」(6年)
- 「話せないような気分でもアプリに打ち込むだけでいいのがよい」(7年)

③アプリの使いやすさと答えやすさ

- 「操作が簡単で、便利」(複数)
- ▲「体と心の調子が普通の時があるので、「ふつう」の選択肢を追加して5段階にしてほしい」(複数)

<保護者>

- 「児童生徒が自分の心身について評価できるのでよい」
 - 「話したいボタンがあることで普段言えないことも訴えやすくなったと思った」
 - 「より児童生徒たちのことを理解していただけることに繋がっていると思う」
 - ▲「あることは知っているが、児童生徒がどのくらい意欲的に取り組んでいるか分からない」
- 年度初めの学級懇談等で、実際にアプリの画面を見せたり、児童生徒たちの声を伝えたりすることで、保護者にアプリ導入の目的や取組等を再度周知する。

<教職員>

- 児童生徒の状態把握にはとても有効。
 - 「ボタンなら押せる」という子の救いになる。
 - 話したいボタンがあることで、周りを気にせず、いつでも先生方とつながることができるので、児童生徒たちは安心できる。
 - 児童生徒にとっては些細なことでも、先生方と関われるきっかけとなるのでよい。
 - 児童生徒が不安や悩みを抱いた際、話したいボタンをすぐに押すことが多く、「今」の悩みに対応することができた。早い段階で、児童生徒の不安や悩みに対応できるよさがある。
 - アンケートでは、アプリを活用することで、効率よく集計したり、全体を把握したりできるのが最大のメリット。
 - ▲手書きのアンケートと違い、筆跡や消し跡等による児童生徒の心の動きを見ることができない。
- 教師が、児童生徒の変化や思いに気付く力を高めながら、アプリを効果的に活用していく。

不登校児童生徒等の早期発見・早期支援事業

1人1台端末等を活用した「心の健康観察」の導入に向けた調査研究の概要

札幌市

札幌市立の全ての学校に1人1台端末を運用した「心の健康観察」アプリを導入するとともに、モデル校を定め、実行性のある効果的なアプリの運用方法等について検討した。

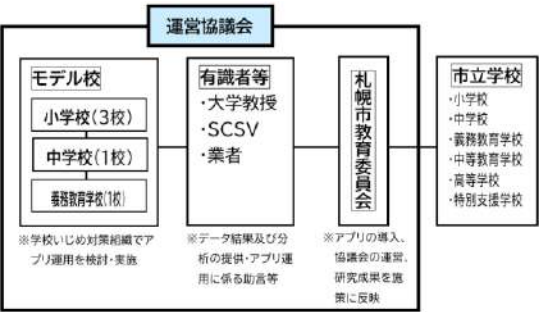
事業の内容

モデル校：計5校
小学校3 / 中学校1 / 義務教育学校1
(計1,997名)

具体的な取り組み

- モデル校に加え、有識者及び本市のSCSVを構成委員とした運営協議会を立ち上げ、7月から計4回協議会を実施した。
- モデル校においては、年2回いじめリスクアセスメントアンケートを実施し、分析を行った。

実施体制



活用した「心の健康観察」アプリ

「こころの健康観察・いじめリスクアセスメントアプリ」
「シャボテンログ」

心と体の健康観察
子どもたちが毎日心と体の状態を記録、相談したい先生への援助要請を行うことができるWEBアプリ



いじめリスクアセスメントアンケート
いじめの発生状況やリスクを把握するためのアンケート。深刻ないじめ状況にある子どもを先生が把握し、教職員間で自動共有できるアンケートシステム



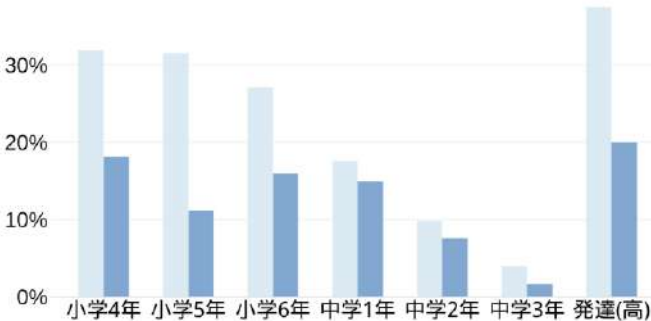
事業の成果

01 いじめの認知と対応強化による発生率の抑制

・推進校5校で、11月と2月にいじめ被害の有無や未解決のいじめの事案を把握するアンケートを実施した。全学年において、1回目から2回目の経過により、いじめの発生率は低下した。

・心と体の健康観察やアンケートの取組を通じて、学校が丁寧な対応を行ったことで、いじめの認知が進みかつ解消までの確実な支援が行われ、いじめの発生率が低下したと考えられる。

発生率 2024/11 2025/02



※いじめ発生率 = いじめ被害を訴えた児童生徒数 / 全児童生徒数

02 相談機会の拡充による児童生徒のSOS発信の増加

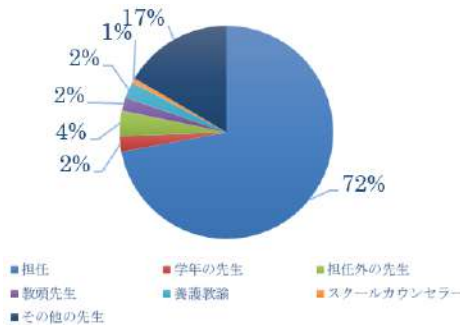
・アプリ上に設定されている「話したいボタン」押下数と内訳、「心身アラート」（不調を3日連続で訴えた児童生徒を教職員に通知するアラート機能）発出数を集計した。

・「話したいボタン」の利用回数は1094回活用だった。

・心身アラートの発出数は、こころアラートが2942回、からだアラートが2855回だった。

・アプリの導入により、児童生徒がSOSを発信しやすく、不調を訴えやすい仕組みが導入されたことで、児童生徒の相談機会が増加した。また、児童生徒の相談機会が増加し、多様な相談先を選択できる環境が整ったことが、相談数の増加に寄与したと考えられる。

相談先	押下数	割合
担任	791	72%
学年の先生	26	2%
担任外の先生	42	4%
教頭先生	22	2%
養護教諭	27	2%
スクールカウンセラー	5	1%
その他の先生	181	17%
合計	1094	100%



事業の成果

03 いじめ対応の迅速化と相談の促進による解消の進展

・推進校5校において、11月と2月に、いじめ被害のうち未解決の事案が何件あるかを
確認するアンケートを実施した。
・中学校では、いじめ対処中率が低下した。児童生徒がアンケートにおいていじめ被害
を申告する際、既にいじめが解消している事案が多いことを意味する。この結果から、
日常よりいじめ対応が適切に行われ、迅速にいじめが解消されていることが分かる。
・小学校5、6年および特別支援学級では、1回目から2回目にかけて対処中率が
増加した。児童生徒がいじめ被害の状況を抱え込まず、より積極的に声を上げている
状況が窺える。今後は、いじめの解消まで迅速に取組を行うとともに、いじめの行為が
止んでいるかどうか複数の目で児童生徒を見守るなど、組織的な対応が求められる。

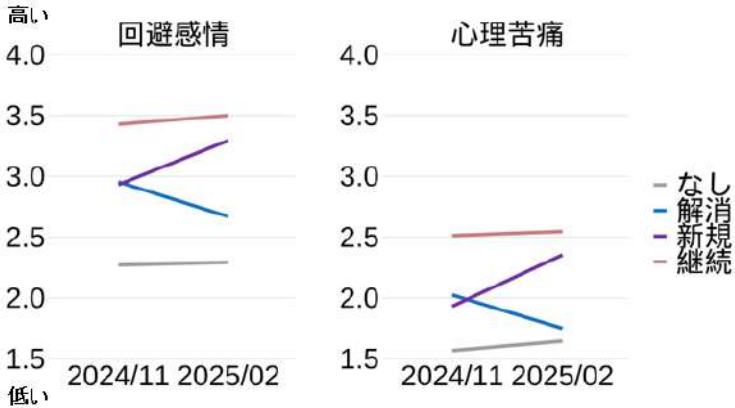


※いじめ対処中率＝「児童生徒が訴えたいじめ被害のうち被害が継続していると回答された件数」/「児童生徒が訴えたいじめ被害」

04 いじめの解消が不登校の減少に寄与することを確認

- ・アンケートで、児童生徒の学校不適応感を確認。
- ・アンケートの1回目と2回目のいじめ被害状況から、児童生徒を以下の4群に分類した。
①被害なし（両アンケートでいじめ被害なし） / ②解消（1回目被害あり、2回目被害なし）
③新規（1回目被害なし、2回目被害あり） / ④継続（両アンケートでいじめ被害あり）

・1回目から2回目にかけて、新規群では回避感情と心理苦痛の数値が上昇しており、継続群では最も高い数値が確認されている。これらの結果は、いじめ被害が児童生徒に強い心理的負担を与え、不登校につながる可能性を示している。一方、いじめが解消された解消群では、なし群との数値差はあるものの、低下傾向が見られる。これにより、いじめの解消が児童生徒の心理的苦痛の軽減に寄与し、その結果、不登校率の低下にもつながっていると考えられる。



※回避感情：「学校に行きたくない」と感じ、その気持ちが行動に現れる状態。
※心理苦痛：学校での精神的な苦しみが「帰りたい」という行動につながる可能性を示す。

05 自傷行為や希死念慮を抱く児童生徒への支援の場を創出

シャボテンログの活用により、児童生徒への支援がより効果的に行われるようになった。多様な相談方法や相談先を提供し、心の状態を伝える機会を確保することで、児童生徒が悩みを抱え込まずに話せる環境が整備され、心理的負担の軽減につながっている。この仕組みにより、いじめの早期発見や解決が促進されるだけでなく、いじめ事案の解消を通じ、精神的に追い詰められた児童生徒の孤立を防ぐことができた事例も多く報告されている。こうした取り組みの結果、いじめを受けた児童生徒への適切な支援が心理的負担の軽減につながり、自傷行為や希死念慮を抱く児童生徒の減少に寄与していると考えられる。以下の事例は、その具体的な例の一つである。

（事例）ある児童が、アプリの「話したいボタン」で「保健室の先生」を選択した。養護教諭が声をかけたところ、友人との言葉のやり取りに悩んでいることが分かり、希死念慮を抱くなど、不安が解消されず、強い心理的負担を抱えていることを訴えた。この状況を受け、学校はいじめの可能性があると判断し、いじめ対策組織で情報を共有し、対応を検討した。本市では、スクールカウンセラーがいじめ対策組織の必須の構成員となっているため、学校は心理的支援の観点から助言を受けつつ、保護者とも連携して対応を進めた。その結果、当該児童に対する不適切な言動は止まり、現在は精神的な安定が見られている。